

ダイヤのA 熱血右腕

ニャン吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

吉川春乃の兄をオリ主として入れた作品。

関東ナンバーワン右腕

吠えるキングの活躍をご覧あれ。

目次

第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
61	57	52	45	41	36	30	23	19	14	8	1

第1話

side 栄純

俺は今、青道高校の練習を見に来ている。

色々回って今はブルペン。

「沢村君。今、ここで投げているのは青道高校のエースの1年生。貴方が来年ここに来れば先輩になる吉川夏樹君よ。そして彼の玉を取っているのも同じく1年生の御幸一也君。2人は青道高校のバッテリーなの。」

と高島さんが言っていた。

エースの投げる玉は横から見ても迫力のあるボール。

一球一球に集中しているのがわかった。

言葉を失っていた。

side 夏樹

後ろから視線が凄い。

仕方が無いか。

俺はマウンドを降りて

「すまん。一也少し待ってくれ。」

と一言声を掛ける。

「はいよお」

と声が返ってきたのを確認して後ろを向く。

「高島先生。隣にいるのは誰ですか？」

と聞くと高島さんが

「そうね。彼は沢村栄純君よ。一応見学でここに来ているの。」

「そうですか。」

と言って俺は隣にいる沢村に声を掛ける。

「よろしく沢村君。」

と言って右手を差し出すと高島さんが

「沢村君は左投げよ。」

と言ったので

「なら沢村君。左手を見せてくれ。」

と言って左手を出させる。

沢村君が手を差し出すので手を触ると

「まだ柔らかい・・・ボールの握りがめちやくちやだ。」

高島先生。ここにいといるという事はスカウトですか？」

と聞くと

「そうね。今はその為の見学よ。」

と答えてくれた。

「東先輩には合わせましたか？」

と聞くと

「この次よ。」

と言っていた。

「ならこの後で俺が一也と組んで東さんと毎日恒例の3打席勝負をするので良ければ見せてもいいですよ。」

と伝えると

「そうね。そうさせてもらうわ。」

と答えてくれたので俺は再び一也を座らせて投げ始めた。

side 高島

「沢村君。彼の手を見たかしら？」

と聞くと沢村君は

「ウツス。」

と答えた。

「彼が言うにはね。ピッチャーって言うのは手のマメだそうよ。いい投手って言うのはマメが無くて硬い皮膚をしているそうなの。・・・正確に言うともマメが無くなって硬い皮膚のみが残るだけでそれを超えるには爪や皮膚のケアが必要らしいわ。」

彼は爪のケアと皮膚のケアを欠かせないの。爪と皮膚を毎日削り爪は決まった長さ
と滑らかさを・・・皮膚も決まった硬さを維持しているそうよ。」

と教えると沢村君は無言のまま夏樹君を見ていた。

side 夏樹

A グラウンドへ行くと東先輩が準備を終えていた。

「なんや夏樹。今日は少し遅いやないかい。」

と言われた。

「すいません東先輩。来年後輩になるかも知れないやつがいるんで青道高校のエースを見せようと思ひまして」

と言うと

「そうかい。ならワシも頑張らんな」

と言って打席にたつた。

俺のフォームはメジャーリーガーのマエケンにそっくりらしい。

昨日一也に俺の能力をパワプロ風に見せてもらった。

その結果が

投手

球速 スタミナ コントロール 投打

1 4 9

A

B

左

変化球 変化量

ツーシーム

スライダー 4

ドロップカーブ 5

フォーク 4

チェンジアップ 1
3

シンカー 2

シュート 2

右

特殊能力

・勝ち運

・ノビ A

・キレ○

・ピンチ A

・クイック C

・威圧感

・奪三振

野手

外野

弾道 ミート パワー 走力 肩力 守備力 耐エラー

3 B B A B C C

特殊能力

広角打法

レーザービーム

盗塁 B

走塁B

チャンスC

対左投手A

アベレージヒッター

アーチスト

らしい。

過大評価って感じが凄いが一也曰くそうらしい。

嬉しいがそうらしい。

とりあえずとの結果は3打数1安打で引き分けだった。

第2話

side 沢村

今日の見学。

最後にはちよつとした勝負になった。

何とか三振に抑えたけど

「あの人の言いたいことが分かるからイライラする。」

と思う。でも

「あの人からエースを奪えるか。」

あの人へのピッチングは圧倒的だった。

夏は予選の決勝で負けたみたいだけど

高島から貰った野球雑誌。

雑誌内容

青道高校のイケメンバッテリー

吉川夏樹と御幸一也

と書いてありこの下には2人の、写真が貼ってあった。

150キロに少し届かない球速で150キロ以上に感じるストレート

打者のバットを交わすような変化球

打者としても高いレベルで纏まり守備も1級品。

夏予選の西東京大会決勝は1年生ながらこの試合後に

左の関東ナンバーワン

都のプリンス　成宮鳴

右の関東ナンバーワン

吠えるキング　吉川夏樹

と呼ばれる2人の投手戦でした。

吉川夏樹は現在青道高校の監督である片岡鉄心の高校時代の様に三振をとる度に魂の叫びとも言える気合いの入った声を出してチームを鼓舞。

決勝戦では

稲代実業対青道

の1年生投手対決を稲代実業の成宮鳴が制しましたが投球内容では負けておらず、延長の末に先にスタミナが切れた吉川夏樹が稲代実業の4番を務める原田にホームランを打たれてサヨナラ負け。

その後崩れてマウンドを自力で動けない中で3年生で青道の主砲、東清国に肩を借りてスタンドに挨拶をして泣きながらこの夏をさりました。

だが誰がこの姿を責められようか。

私達は青道高校の唯一無二の投手という弱点が解消されることを確信したと共に彼の成長を期待する事になりました。

と書いてある記事を読んだ俺は

「あの人達はそんなにすごい人達だったのかよ。」

と唇を噛み締めた。

side 夏樹

最近青道高校野球部マネージャーで俺の彼女は唯が学校にコンビニで買ったという高校野球の雑誌を持ってきて昼飯の時に見せてくれた。

「夏樹君。関東ナンバーワン右腕だよ。吠えるキングだよ。高校時代の監督を彷彿とさせるらしいよ。」

と言って来た。

「それでも俺は・・・関東ナンバーワン右腕と呼ばれても鳴に負けた。唯を甲子園に連れて行きたかったんだけどな。」

と言うと唯が

「夏樹君なら行けるよ。秋の大会で勝ち続けて春の甲子園も・・・そして今度こそ夏の甲子園も。」

と言つて励ましてくれた。

俺はいつも唯に励まされてばかりだな。

中学の時も・・・そして今も。

そして俺は決意する。

今度こそ日本一のエースとして唯の自慢の彼氏になると。

そして幼少期からの夢であるプロの世界で活躍すると。

そう決意して俺は立ち上がり唯を抱き寄せる。

唯はあたふたしているが今は関係無い。

「俺は青道高校野球部のエースとして・・・唯の彼氏として日本一のエースになる。今年の負けを精算するにはそれしかないからな。」

と言うと唯は俺に抱き締められた状態で

「夏樹君。それは違うよ。」

と言つて話を続けた。

「夏樹君は先輩達の言葉を忘れたの。一番辛かったはずの先輩達が試合後に言ったこと

を忘れたの?」

と言つて来た。

先輩達が試合後に俺に掛けてくれた言葉。

「お前で負けたのなら仕方が無い。」

と泣きながら言つてくれた。

「来年こそは・・・来年こそは青道高校を日本一にしてくれ」

と言つてくれた。

そして東先輩が

「おい。夏樹。お前のおかげでここまで来れたんだ。ありがとう。そして悪かった。最

後まで援護してやれんかった。・・・お前は俺の知るどの投手よりも凄い投手や!」

と

忘れる訳が無い。

でも負けは負けだ。

だからこそ俺は唯に改めて言わないとならない。

「唯。俺はこれからもつと頑張る。これから始まる秋の予選大会、春の甲子園。まずはそこで結果を残す。東先輩が言つてくれた。どの投手よりも凄い投手。というのを東先輩だけの言葉にしない為に。だから・・・唯の冬休みを俺に出来ないか。」

と言うと唯は

「仕方ないな。夏樹君がオーバーワークしないように近くで見せてあげる。」

と言つて俺の腕に抱き着いていた。

一応ここは教室内だぞ。と思いなながらも

唯が気にしないならいいか。

と思つたのだつた。

そしてしばらくして俺はまた監督にエースに任命してもらい丹波さんと2人で春の甲子園出場を決めた。

冬休みは唯と相棒の一也に頼みひたすら自主練とトレーニングを。

もう負けない・・・負けたくない。

その一心で自分を1から鍛え直した。

第3話

冬の死ぬかのような走り込みや監督の鬼ノックを終えてもうすぐ春
そして俺達はあの舞台へ向かっていた。

春の甲子園は初戦は俺が先発

4回の投球を終えてから何故か監督に

「吉川。いつもの雄叫びは何処へ行った？まだ気合いが足りないぞ。」
と言われた。

そして俺の中から何かが燃え上がってきた。

俺は監督に

「やってやりますよ……ここからは2塁まで1人として行かせません！」

俺はそう言って一也にリードの注文をした。

4回までの打たせてとる省エネピッチングを辞めて

5回の俺の投球は4回までと内容が違った。

去年の秋大会などの公式戦での最速を上回る153キロを何度も記録した。

相手打者はそこから常にボールの下を振るようになった。

更にチェンジアップやフォーク、ドロップカーブ等の下への変化が強い球種で打者の視線をずらしシュート、シンカーにスライダーで打者の手元を抉る事で俺は5・6・7回と連続で三振をとり結果的に9者連続空振り三振に抑えた。

8・9回は一也が突然、変化球メインのリードになったが俺は元々変化球投手。

これなら一巡した打者達は俺のストレートが頭に残っている筈だ。だからこそ変化球がより一層いきてくる。

スライダーとフォークを軸にドロップカーブで視線を変えて結果監督に宣言した通り2塁・・・それどころか1塁すら踏ませぬ投球になっていた。

結果10-0で俺達青道は勝利した。

2回戦は丹波さんが先発するも5回に捕まり6点先制される。

6回から俺が投げるも最後は1点届かずに甲子園を2回戦でさる結果に終わった。そして新入生が今日やって来る事になった。

俺は親に頼み、家が近いにも限らず野球に、集中する為に寮で生活をさせてもらっている。

部屋では親から電話がきていた。

「やっやっ。」

「夏樹。まったく春の甲子園の後くらい1日でも帰って来なさいよ。」

「流石に無理だよ。課題があるからそこを無くさないよ。・・・でも

夏の大会が終わったら少し帰るよ。」

「あらそうなの。ならどうせなら夏休みの後半に帰って来なさい。甲子園の優勝投手としてね。応援してるから。」

「そうする。」

「それとその時は唯ちゃんも連れて来なさいよ。」

ぶっ！

と少し吹いてしまった。

「御幸君から少し話を聞いたわよ。中学の時から付き合っていて唯ちゃんが志望校を変えてまで着いてきてくれたそうじゃないの。」

一也め。覚えてろよ。

「まあわかったよ。確か春乃は青道に受かったんだっけ？」

「そうよ。」

「野球部のマネージャー希望か？もしかして。」

「みたいよ。」

「そうなのか。なら、人柄の事は春乃に聞いてよ。」

「そうするわ。」

「それじゃあこれから自主練だから切る。」

と言つて電話を切った。

門の所へ行くと唯が待つていた。自転車に乗つて

夜のランニングは唯をそのまま送るのも込で走つてゐる。

唯の漕ぐスピードで片道30分程。だいたい5キロほど。

この距離ならば唯のスピードに余裕で着いていける。

「唯。夏の大会が終わつたら親が唯を連れて家に帰つて来なさいだ。」

と言つと唯が驚いて

「夏樹君、親に付き合つてるの事を言つたの？」

と聞いてきたので

「一也が親に言つたらしい。中学の時から付き合つてゐる事を。1年から付き合つてゐる事は知らないみたいだけど。」

と返すと

「そうなんだ。・・・学校も違つたしお互いに塾とかに通つてゐる訳じゃないからね。中学の1年の時に出会つたのは本当に凄いことだよ。」

「確か、あの時は転んで擦りむいて痛そうにしていたところを俺がランニング中に偶然

見つけたんだよな。」

「タイムリングが悪いのか良かったのか。」

「そうだな。お互いに携帯を持っていて唯がお礼をしたいからって俺の電話番号とメールアドレスを強奪したんだよな。」

「確かにお礼をしたくて交換はしたけど強奪は酷いよ。」

と言つて少し拗ねていた。

唯は拗ねていても可愛いと思う。

「でも出会ってから付き合うまで早かったよな。」

「そうだね。」

と話しながらランニングをしていると唯の家の前に着いた。

毎日唯を送ってから寮へまた走る。でも週に1回と俺が投げて試合に勝った日のみキスをしてから俺は唯が家に入るのを見てから再び寮へ走り帰る。

第4話

寮へ戻ると1年生が1人来ていた。

この部屋は俺の1人部屋。

だった部屋に今はもう1人いる。

部屋に入り真ん中に置いてある小さなテーブルを挟んで2人で座っている。

「東条秀明です。よろしくお願いします。」

と自己紹介してきた。

「俺は」

と言おうとすると言う前に答えてきた。

「青道高校のエースで関東ナンバーワン右腕の吠えるキングこと吉川夏樹さん。ですよね。僕は吉川先輩に憧れてここに来ました。」

と嬉しい事を言ってくれた。

「俺の事は知っているんだな。俺も名前を聞いて思い出したよ。シニアの名前までは覚えていないけど東条ともう1人、一つ下に良かったのがいたよね。確かサードで」

と言うと

「はい！金丸信二です。覚えていてくれて光榮です。」

と答えてくれた。

「まあとりあえずはこの部屋の事を話すよ。」

「はい。」

と言つて来たのでとりあえず説明した。

・二段ベッドが2つあるから俺の使つてない方を自由に、でも出来るだけ綺麗に使う事。

・部屋に小さな冷蔵庫が置いてあるから自分の物は遠慮なく入れてもいいけどちゃんと名前を記入しておく事。

・夏の大会前、大会後、冬の合宿の時に自宅通学の人も寮に泊まるから出来る限り荷物は個人のタンス等に入れておくこと。

・この部屋に偶に俺の彼女が入ってくるから見られて困るものは置いておかない事。

・夜に一也と試合のビデオを見る事があるからその時は音が煩いこと。

・そして最後に練習中はともかくこの部屋にいる時はお互いに堅苦しい事は無し。

の6点

「とりあえずこれからよろしくな秀明。」

と言つて右手を差し出して握手を求めると秀明も右手を差し出して握手をした。

秀明の右手のマメと硬さをハッキリと見た訳では無いが
まだ淡い感じがする。

指の長さや握手の時の握力。

足りない。

だが打者としてのマメは素晴らしい物がある。

打撃に力を入れた投手か。

「秀明。明日は朝が早い。だから早めに寝ようか。初日で軽めのメニューで午後は練習は無しだから俺と彼女、もしかしたら一也が秀明と金丸の歓迎会をしよう。誘って置いてくれ。」

と言うと

「わかりました。」

と返事をしたのを確認して俺は洋一の部屋へ言った。

部屋に着いて中に入ると

ゲームをしていた。

「洋一。ゲーム中か。1年は・・・」

知っている顔だった。

「おう。こいつだよ。沢村。」

と言うとプロレス技をかけられている筈の沢村が

「あー！吉川夏樹！」

と呼ば捨てていきなり呼ばれて洋一が

「夏樹もお前の先輩でここのエースだ！」

とプロレス技の力を更に込めた。

沢村が苦しそうにしているが自業自得なので無視。

「増子さん。お疲れ様です。」

と言うと

確かに沢村ちゃんはうるさい。

と紙に書いて返してくれた。

第5話

新入生が自己紹介をしている中、一也がまだ来ていない
遅刻確定だ。

そしてもう一つ問題が。

沢村も来ていない。

隣にいる洋一に話を聞く。

「洋一。沢村が来ていないようだが？」

「まだ寝てるぜ。」

「起こさなかったのか？」

「声は一応掛けたんだけどよ……起きねえんだ。」

「その時に増子さんは？」

「早めに出て自主練。」

「なるほど。……洋一。今日、俺の部屋で新入生を3人誘って歓迎会をやるもりだが来るか？」

「誰が来るんだ？」

「同室の東条に中学からの東条のチームメイトの金丸。あとは沢村でどうだ？」
と聞くと

「賛成。」

「あとは一也と唯を誘っておく。というか唯には声をもう既にかけてある。」

「早いな。」

「朝のランニングの時にな。」

と話していると沢村と言って一也が忍び込もうとして失敗して洋一に増子さんまで走らされていた。

その頃俺は

「ノリ、少し球が早くなったか？」

「夏樹に言われると嬉しいな。．．相変わらず夏樹の球は痛いね。」

とキャッチボールをノリとしていた。

しばらくキャッチボールをして、終わって朝飯の時間になった。

食堂に行こうとすると妹が声を掛けてきた。

「お兄ちゃん。」

と春乃が声を掛けてきた。

「どうした春乃？」

「マネージャーは今からなんだ。」

「そうか。どうだ青道高校は？」

と聞くと春乃が

「先輩達は優しいいい人達だから。」

と言っていると後ろから唯が来て

「夏樹君の妹なのにドジっ娘だけどね。」

と声を掛けてきた。

「まあそれが春乃だから辛抱強く頼むよ唯。」

と言うと春乃が

「お兄ちゃん酷いよ。」

「でも転けるだろ？」

「転けないよ！」

「今日中に2回くらい転けるな。」

・・・唯、報告よろしく。」

「任せて夏樹君。」

と話していると春乃が

「お兄ちゃんも唯先輩も酷いですよ！」

と言っているが俺は飯の為に食堂に入る事にした。

いつもの席に座ると一也が

「エース様の飯は用意しといたぜ。」

と言っていたが山盛りもいい所・・・富士山盛りとでも言おうか。

「なんの嫌がらせなんだ一也。」

と一也をジト目で睨むと笑いながら

「エースの馬力を上げようと思ってな。」

と返してきた。

数週間前に自己最速の153キロを記録して一昨日の練習中に155キロを叩き出した俺にどこまで。

「何処まで増やせばいい。」

と聞くと一也が笑いながら

「某日本人最速投手クラス。」

と言われて椅子から俺は落ちてしまった。

「165キロか？」

と聞くと

「いけるだろエース。」

と返してくる。

「高望みし過ぎじゃねえか？」

と俺は聞くも一也は

「来年のドラフトを確実に1位で通過するならこのぐらいやってくれないとな。」

とキツイ言葉を言ってきた。

「一也、現段階では大学進学希望なんだが？」

と言うと一也が

「夏樹は絶対にプロに行くべきだ。俺は夏樹以上のピッチャーを見たことが無い。」

と返してきた。

と言うよりそろそろ関東大会への予選中にこいつは何を求めてるんだ。

「夏、158で許せ。」

と言うと一也が間髪入れずに

「夏、160」

と返してくる。

「そもそも俺は変化球投手だ。」

と言うと一也が

「夏樹はスーパードライ型だ。」

と返してくる。

「関東大会に入るまでにランナー無し又は一塁の状態であと2本スタンドに打てばやってやる。そもそも俺はあと一つ変化球を覚えようと思つてたの。」

「変化球を活かすも殺すもストリートだ。変化球よりもストリートだ。」

と睨み合いになるとキャプテンが

「・・・夏樹に御幸。お前達の高い目標はともありがたい。だが俺達は打撃の青道だ。打撃を疎かにするなよ。」

と言つてきた。

「それは勿論です。こんなチャンスにしか打てないやつに通算本塁打数で負ける訳にはいかないんです。」

「こいつに打点だけは負けられないんですよ。」

と言つていた。

ちなみに通算本塁打と打点は

俺が 30本 83打点

一也が28本 98打点

とお互いに結果を残している。練習試合も込だが。

ちなみに純先輩曰く

俺は飛ばし過ぎ

一也は返し過ぎ

らしい。

そう。飛距離だけで言えば去年から東先輩に引けを取らないだけ飛ばしていた。でも確実性が東先輩程無かった。

一也もランナー無しでは三振確定だったがランナーが一人でもいれば誰よりも読み打ちだけは上手かった。

白州が羨ましい。

ミスター堅実マンめ！

第6話

沢村は

初日寝坊で朝練遅刻

監督に謝罪無し

エースになる為に来たと宣言

遠投でホームベースからバックネットに届けばいい

ムービングボールで届かず

暇なら走ってろ

走り続ける事数日

春の関東大会2回戦

丹波さんが先発の日。

丹波さんの乱調で敗退。

投手が足りた！

1年生で使えるやつはいないか！

現在に至る。

因みに俺は一也と一緒に下半身を鍛えていた。

なぜなら

以前、俺が一也に関東大会までにホームランを2本打つたら夏大会までに160キロを目指すとやくそくしたためである。

そしてそれと並行して変化球も習得中。

SFF（スプリット・フィンガーズ・ファスト）

日本人メジャーリーガーがよく利用する変化球だ。

一応俺は背が高いから高い所からボールを投げ降ろそうと思えば投げられる。

その為、変化の角度が下を向き落差が上がる・・・そんな予定だったんだが。

「夏樹。」

「はい。」

「SFFの曲がり方を調整出来ないか？」

「なんで？」

「変化の角度がえげつなくてストライクに入らん。フォークなら完全に制御出来ているのにSFFはまだ調整が効かない。だったら少しづつ変化を遅くするしかない。」

「最も。問題点の提示を」

「変化始めが少し早いからリリースの調整」

「他は？」

「無い！」

と言われてビックリ

「俺は今まで低くて入ってないと思っていたんだが？」

と聞くと一也が

「変化のタイミングが早いから低く見えるだけ。」

と言われた。・・・なるほど。

「一也。投げ込み序でにSFFの強化。ブルペンに行くぞ。」

と言うと一也は

「なら、投手目線と横から、捕手からの目線で影像が欲しいな。」

と言って来た。

なので

「任せろ。唯に頼んどく。」

「了解。30分後にブルペンに集合な。」

と言われたので俺は急いで唯を探して説明、カメラを高島さんに3台と3脚を3台、ついでにスピードガンを借りようとする。と部長が1年生対2軍の試合に監督が持つて

行っているとの事。

高島さんが終わったら持ってきてくれるそうで

ブルペンにて投げ込みが始まった。

俺と一也の投げ込みはいつも唯が近くにおいて話し合いの要点を纏めてもらい、だいた
い2時間くらいかけて100〜120球投げる。

10球、同じ球種を投げ投げたら2人で問題点の模索と改善の方法を考える。

2人でわからない時は唯に纏めてもらったメモを元に監督に指導を受ける。

この繰り返しを去年、1軍に上がってからやって来た。

今日は

ストレート

SFF

ストレート

ドロップカーブ

ここで監督がやって来た。

そして今。

「吉川。今日のこのピッチングでの課題はなんだ？」

と聞かれて

「SFFの調整とストレートの最高球速と平均球速の測定とコントロールです。」

と答えると

「ならば今日はSFFを30球と残りはストレートにしろ。SFFは本来ならばストレートよりは肘に負担が大きい。一球一球に集中して取り組め。」

と言われた。

「はい。」

そう答えて俺がマウンドに戻ると監督は一也にSFFの問題点を伝えている間に俺は唯にビデオを見せてもらう。

「夏樹君の投げるSFFはやっぱり少し落ち始めが早いから落とす所を遅くした方がいいと私は思うな。離す所を遅くしたりとかしてね。」

と言ってくれる。

「なるほど。確かにビデオを見る限りだと落ち始めが早いな。今の意識が叩き付けるだから平行に投げるといふイメージにしたらどうなると思う？」

「何とも言えないかな。試してみないと。」

「わかった。」

と言うと一也が監督との話を終えたらしい。

S F F 一球目

今までの叩きつけるイメージから地面と平行に投げるイメージに変えて投げてみる。

すると

一也の構えた低めに見事に行くが横があわせられない

第7話

あれから少ししてSFFは完成。

あとはコントロールをもつと精密にすることだな。

と思っていると東条と沢村に金丸の3人が・・・東条が2人を連れて部屋にやって来た。

すると東条が

「吉川さん。質問をしてもいいですか？」

と本を読んでいる時に言ってきた。

「なんだ？」

と返すと

「以前、吉川さんのブルペンでの投げ込みを見せてもらったのですが何故、あそこまでの緊張感の中なのにマネージャーの夏川先輩をブルペンに入れているのですか？」

と聞いてきて東条の横の沢村と金丸も凄く興味ありげに見てきた。

「話すから東条。二人分の座布団を用意。」

と言うと東条が直ぐに用意した。3人を座らせて俺は話し始める。

去年の・・・東先輩達の最後の試合の事を

「去年の夏。俺がスタミナを切らした所をホームランを打たれて負けた事は知ってるな。」

と言うと3人は頷く。

「あの試合の後に俺はオーバーワークを日々繰り返し返した。スタミナが切れた事を心底後悔してひたすら自分を追い込んだ。でも1週間経った時に唯が俺を呼び出して1発盛大にビンタをしたんだよ。「先輩の言葉を忘れたの！」って泣きながらな。そしてその後、「夏樹君は凄い投手なんだから、負けたのもスタミナが切れたからだから余計に基礎からしっかりするべきだ」ってな。それで以降、俺は唯に投げ込みの時にビデオを撮ってもらおうという理由を付けて投げ込みをし過ぎないようにブルペンで見張ってもらってるんだ。」

と言うと沢村が質問してきた。

なんで三振を取ると吠えるのか？

と

「俺はここにいてるぞ！というのを皆に示す為だ。あとは俺自身がその方が気合が入るからな。・・・今度は俺から3人に聞くぞ。エースとはなんだ。」

そう聞くと3人は悩んだ。

少し悩んでから金丸が手を挙げた。

「野手目線からでいいですか？」

「いいぞ。」

と返すと金丸は

「この人なら勝てる。俺達が点さえ取れば勝てると思えるピッチャーをエースと言うと思います。関東大会。俺は先輩の背中でそれを感じました。」

と答えた。

そして次に東条が

「俺はわかりません。」

と

「わからないか。」

「はい。わかりませんと言うより答えは無いと思います。でもただ一つ言えることはエースは弱気ではいけないという事です。」

と

答えは出ているじゃないか。

「金丸！野手目線からの意見はそれはそれで正しいし東条の弱気ではいけないも正しい。最後は沢村。お前はなんだ。」

と沢村をしつかりと見て答えを求めろ。

「前にクリス先輩に言われた事があります。俺には3年間を任せられないと。そして吉川先輩には任せられると。だからエースは皆の思いを任せられる投手だと思います。」

と

こいつも偶然とはいえ良い答えを持つてな。

「沢村の答えも正しいと俺は思う。でもな俺の理想のエースは

皆に頼られ、皆を頼れる

投手だけじゃなくてチームメイトの皆やマネージャー、監督達首脳陣との信頼が厚い投手

だと俺は思う。投手はエゴイストでないと成れないがエースはあーにエゴイストの1歩先に俺はあると思う。」

と俺は答える。

東条と金丸はある程度理解してくれたようだが沢村はわかっていないようだな。

「ようは信頼されるようにそして自分を高め続けろという事だ。もし投手を続けていくなら投手として東条に沢村は遠慮無く聞いてこい。俺も相手の技術で欲しい所や補いたい所があれば遠慮なく聞く。それが先輩でも後輩でも敵チームでもだ。」

と答えて俺は立ち上がり

「俺はこれからランニングに行くが着いてくるか？」

と聞くと3人は

「「はい！」」

と返事をした。

「5分後に裏に集合だ。俺は唯を呼んでくる。」

そう言つて俺は部屋を出た。

第8話

ランニングをしながら俺はいつも通り唯と話をしていた。東条達3人は何とか着いてくるのがやつとのようだ。

「よかったの。3人も一緒に走らせて。いつもよりペースが遅いけど。」

「気にしない。それに俺の練習に着いてきた程度で俺に勝てるとは思えないしあの3人は俺のお気に入りだ。面倒をみてやりたいだろ。」

と3人の事を話しながら走っていると唯の家の前に着いた。

まだ5km(20分)しか走っていないのに

少し遅れて3人が唯の家の前に着いた。

「まったく・・・遅いぞ3人も。ここまで5km。そんなに距離は無いだろ。」

と言うと東条が

「ペ・・・ペースが・・・は、速い・・・です。」

と答えた。

俺はあと3キロ先まで行ってUターンしてこの前を通るから

「唯。悪いんだけど」

とここまで言ううと

「わかつてる。お茶を3人分とここで休ませてあげるから夏樹君が戻って来たら一緒に走って帰りなよ。」

と唯が俺に続いた。

3人は目をキラキラさせている。

「すまん。唯。それじゃあ3人はここで待つてろよ。」

そう伝えて俺はまた走り始めた。

side 夏川唯

私がかの中からお茶を3人分持つてくると東条君が突然

「えっと夏川先輩はなんで吉川先輩と付き合ってるんですか？」

と聞いてきた。

もう慣れた質問だから何とも思わないけど

「夏樹君が好きだから。どうして？」

「吉川先輩は自分にも他人にも厳しい人なので何故かと思ひまして。」

と続けてきた。

自分にも他人にも厳しい人か。

「夏樹君が厳しいのは野球に関わる時だけだよ。まあ自分には常に厳しいけど生真面目

でも無いし。それに・・・私は夏樹に君一目惚れしたの。」

と答えると3人は驚いたような顔をしていた。

「別に驚く事でも無いでしょ。初めて会ったのが中1の夏休み前夏樹君がランニングをしている時にたまたま私がまあ怪我をしたの。そこで痛くて立ち止まつてる時に夏樹君がやって来て私に声をかけてくれた。そこでまあ家までおんぶして連れて来てくれて私が夏樹君にお礼をしたいからってメアドと電話番号を教えて貰ったの。付き合ってたのはその後すぐの夏休み中にね。」

と言うと東条君達はいがいそうな顔をしていた。

そんな話をしていると夏樹君が戻って来て

「悪い唯。俺もお茶を貰っていいか？」

と聞いてきた。

「うん。・・・お母さんがたまには中に来て行って言ってたよ。」

「そうか。じゃあ少し邪魔する。」

そう言つて夏樹君は家の中に入って行った。

10分位で夏樹君は家から出て来て

「さあ3人も。帰るぞ。後ろから追い付くから先に行つてろ。俺に抜かれたら・・・明

日のランニングをタイヤ1つ追加な。」

と言つて先に走らせてから私の方を見て

「唯。」

「何夏樹君？」

と答えると突然私を抱き締めて

「先輩達の最後の大会まで後2ヶ月。これからも頼むな。今回こそは甲子園で優勝して見せるから。」

と耳元で囁くと私の唇にキスをして返事も聴かずに走り出してしまった。

そこから私は多分顔を真っ赤にして夏樹君を見ているしか出来なかつたと思う。

第9話

帰りは結果を言うと3人も俺に抜かれて3人が普段しているランニングにタイヤを追加で1つという事になった。

あれから少しして

少し前にあった春の西東京予選大会で

準々決勝で市大三高と当たり俺は完封勝ち

だがその次が問題だった。

丹波さんの大炎上。

川上も続く様に炎上し2人で6回ともたずに負けたと言う結果があった為に1年生対2軍の試合が行われた。

恐らくは投手探し。

2番手3番手当たりを探すんだろう。

俺が言うのもなんだが俺が去年からエースを張ってるけど今までの青道高校には絶対的なエースがいなかった。今も丹波さんがまあまあいい投手ではあるが1試合全て任せられるかと言われるればNOという投手しか俺以外いないのだ。

まあ俺も全試合で完封出来るわけでは無いが都内ならば稲代の鳴との投げ合い以外ならスタミナを切らす事は無いだろうし今後は鳴との投げ合いでもスタミナを切らす事は絶対に無い。それだけの実力を付けた自身はある。

まあとりあえずこの試合の結果は2軍の勝ち。

東条が1年生チームで先発をやっていたが俺が教えたフオークを適所に使いながら増子さんを敬遠して、2イニング無失点。その後は何人かの投手は捕まって打られたが最後の2人

降谷が1球で一軍入り

増子さんはスタメンに復帰だ。

沢村はそれなりの好投で二軍入り

他の二軍入りメンバーは

東条に金丸、小湊・・・亮介さんの弟だ。

翌日

俺はブルペンに一也に唯という。

「ラスト10!」

と俺が伝えると一也が

「了解！」

と返事をする。

投げ終わると一也が

「夏樹。今日の球はいつもより伸びてたな。」

と俺に言ってきた。

「でもその伸びたストロークをコントロールしきれなかった。」

と伝えると

「なら、明日もまたブルペンだな。」

と笑いながら返してきた。

「そうだな。」

それじゃ俺はバッティングに行ってくる。」

そう言つて俺は急ぎ足でバッティングに向かった。

side 一也

今日の夏樹の球は今までにないくらい伸びてきたな。

「夏川。少しいいか？」

と俺がマネージャーで夏樹の彼女の夏川に声を掛ける。

「どうしたの御幸君?」

「夏樹の球速はどの位だった?」

と聞くとノートを取り出して今日の全球速を見せてきた。

「いつもより遅かったのか?」

「うん。いつもより遅かった。・・・でも速かった。」

「映像は?」

と聞くとバックからビデオカメラを取り出す。

昨日のやつと見比べる。

腕が昨日よりも縦になってる。

「このカメラを少し借りてもいいか?」

「いいけど何に使うの?」

「クリス先輩と違いを見て結果をあぶり出して夏樹に伝える。」

そう伝えて俺はクリス先輩の元へ走った。

リハビリから戻って来たクリス先輩を見つけて俺はビデオを見せる。
わかったことは3つ。

1つ目は回転がより縦回転になった事。

2つ目は縦になった事で横のコントロールがしきれなかった事。

3つ目は少し窮屈になった事で球が遅くなった事。でもこれはもしかしたら逆にいい事かもしれない。

結果が出て俺は部屋で夏樹と話をした。

「夏樹。今日の投げ方に違和感はないか？」

「特に無いな。突然どうしたんだ？」

「少し前までクリス先輩と夏樹のフォーム撮ったビデオを見て話をしていたんだけどよ、前より腕が縦に回転していたんだ。」

「それはいい事じゃあないのか？」

「いい事だけど球速が遅くなっただろ。でも実際は速く感じたんだ。今まで以上に。」

「平均は？」

「146」

「普段は？」

「148」

「誤差じゃねえのか？」

「普段から差があればな。」

「なるほど。練習から平均に差が出ていたと。」

「そういう事。それに今日は1度も150を越えなかった。」

「マジかよ。でもこのままいくぜ。最後に少し掴んだものがあるんだ。」

「・・・わかった。でも」

「ああ・・・わかってるよ。イメージが前と同じ奴も練習しとく。」

「ちなみに今までのイメージは？」

「背負い投げ」

「今日は？」

「餅つき」

「ププ——ツツ!!!なんだよそれ。」

と話していると東条が声を掛けてきた。

「夏樹さん。御幸さん。その話、自分も加わってもいいですか？」

「いざいざ。」

「ありがとうございます。それでイメージが餅つきってなんですか？」

「そのままだよ。たたき落とすんだ。ボールを握り潰す感じで。」

「それをイメージって言うんじゃないのか夏樹？」

「確かにな。でも一言で言うとな餅つきなんだよ。」

「握り潰して叩き付ける。餅つきのイメージ。夏樹さん。俺は投げる時に。ミットを押

し込む感じなんですけど・・・」
と話は続いた。

結果

夜更かしになった。

第10話

あれから少しして夏予選大会の背番号発表となった。

俺の背番号は1

またエースに指名して頂いた。

因みに投手陣の背番号は

丹波さんが10

川上が11

降谷が18

沢村が20

となった。そして東条・・・秀明は野手として結果を残して17番の背番号を貰う事になった。因みに外野手だ。

そしてあのフォームが縦になり少し球速が落ちてから少し経ち、練習の甲斐あって球速も再び戻って来て157キロまで上がった。

そして

直前の合宿になった

去年は俺も初日で死にかけた。

高校野球の怖さを知ったけどこの辛さを知れば本番は怖くは無かった。

因みに俺は投手と外野の練習に合宿中は半々で入る。

外野はレフトだ。

「坂井先輩。またよろしくお願いします。」

「おう。夏樹が投げる時は俺が守れる様にしないとな。」

「はい。坂井先輩の守備は安定していますから俺がいたします。でも東条も中々の物を持っていきますよ。」

と言うと秀明は

エッ!

という表情になるも

「俺なんかまだまだです。坂井先輩。指導の方、よろしくお願いします。それと頑張つて試合に出れるようにします!」

と言っていた。

それを聞いて俺は

「そうか。頑張れよ東条。でも俺的には東条はバッティングを期待しているぞ。春市と2人で1年生らしいバッティングを頼むぞ。」

と言つて東条を見ると気合を入れてから

「はい！頑張ります！」

と返事を返してきた。

そして俺が前を向くと監督が

「外野！オールセカンド！」

と言つていたので全員で返事をしてから監督が鋭い打球をライン際の抜ける様な打球を打ってきた。

俺は俺を少し回り込みながら捕球してショートの中継しやすい所に強いボールを返球した。

ノックが終わってからマネージャーの作ったおにぎりを食べている時に洋一が沢村に大量に食べさせていたのを見て俺は沢村が吐く事を予感した。

因みにベースランニングの最中で1年ズはだいぶ限界が来たらしい。4人共倒れそうになっている。

俺はそんな4人に声を掛けながら必死に走った。

ベースランニングを終えて1年ズは油断したのか膝に手を付き動くのもしんどそう

な状態でいるが監督はそんなのはお構い無しに

最後に大きな声を出してグラウンド20周の指示を出した。

1年ズは大きく遅れながらも走り切ったその根性は素晴らしいな。

そして最終日は俺はずっとピッチングをしていた。

途中グラウンドに戻ると内野の春市は抜かされていた。

東条は何とか残っているも声が出ていない。

一体いつからノックが続いているのか。

でもこんな人達に後ろを任せられるのは幸せな事だと身を持って感じた。

翌日から2日間にかけて練習試合を2試合ずつ行うことになっている。

俺は大阪桐生と投げ合っている。

疲労からかいつもの様な三振を狙う事は出来なかったが撃たせて取ることで0-0
で試合を終えた。

2試合目は都内の山梨県の山守学園に1年生2人が投げたが2人合わせて大量失点。

2日目の初戦はお互いにフルメンバーでは無いとはいえ稲代と川上ノックが投げあ
いだ。

まあそれなりの結果だった。そして最終戦で悲劇は起こる。

なんと丹波さんの顎に相手投手が投げた球が直接当たったのだ。

直ぐに監督は丹波さんに寄るが病院へ行く事になる。

結果

骨にヒビが入っているという。

大会も準々決勝までは復帰出来ないというものだった。

キャプテンや伊佐敷さん達はかなり動揺していたが監督が声を掛けたのか何故かブルペンで投げていた。

全然ダメダメだけど。

そして少ししてから開会式を終えて俺達の初戦が始まった。

第11話

「大事な初戦。先発は降谷。お前がいけ。そして吉川。お前はレフトだ。いつでも行けるように準備を怠るなよ。打順は5番だ。」

と言われた。

相手は普通にやれば勝てる相手とはいえ1試合勝って勢いに乗っている。

その勢いを根こそぎ奪ってやる。

と全員が意気込んで試合に臨んだ。

俺達青道は先攻

相手の先発は背番号10の右のアンダースロー

まあそんな事は正直どうでもいい。軌道が違いすぎていきなり1番打者の洋一が三振した

がその後亮さんが洋一の打席で掴んだのか強打するもサード正面のライナー。

伊佐敷さんは遅すぎて体制が崩れながらも内野と外野の間にポテンヒット。

4番の哲さんがフェンス直撃の当たりを打つも打球が速すぎて二死一三塁となり俺の打席になった。

アナウンスが俺の名を告げる。

左打席に立ち俺は集中する。簡単にストライクを取らないことは予想出来ている。

初級は外にストリートが外れてボール

俺は打席を出て守備位置を確認した。

そしてスタンドにいる唯を見る。

ガッツポーズを見て俺は初戦特有の硬さが取れた気がした。

二軍メンバー達からの応援に合わせて俺は打席に入り口ずさむ。

「狙い撃ち〜」

一也がやりそうだな。

俺はそう思いながら構える。

ここでピッチャーが投げてきたのは真ん中高めの失投

「激甘」

俺はそう言つてバットをフルスイング

打球は高々と上がる

俺はスイングを終えた瞬間にホームランを確信した。

相手の外野は1歩も動かない。

ゆつくりとダイヤモンドを走り始めると後ろからバットが地面に落ちた音が「カラ

ン」聞こえた。

俺たち側のスタンドからは大きな声が聴こえてくる

一塁を回ると同時に俺は手を挙げて

「シャー！」

と声をあげていた。

初回の俺のスリーランから更に後続が続いきなり7点。

とは言えこの初回到洋一が二三振は不味いな。

裏の守備

こちらの先発は降谷。

あのまさに唸るような豪速球は去年の俺より上だが

・・・全てあの高めのボール球で振らせているだけだ。

3回は今度は1年の左腕沢村が降谷に変わりマウンドに立った。

テンポのいい投球だ。

だけどーそれだけじゃ無い。あの見えにくい左手。俺は降谷よりも沢村の方がいい投手に見える。

が・・・いきなりフォアボールはダメだ。まあその後は抑えて無失点。今回は良しと

しよう。

4回からは調整を兼ねて川上がマウンドに

低めに集めてスライダーを引っ掛けさせる丁寧なピッチング。

打たせてとる手本の様な投球だ。

そして最終回はと言っても5回だが俺が投げた。

だが俺は今回は調整。

140中盤のストリートを使いノビとキレを確かめながら投げる

コーナーに丁寧投げる。

それでも相手はバットに当たらない。

最終的に35対0で5回コールド勝ちを納めた。

しばらくは俺のピッチングは無く

試合が進み次の試合が明川との試合だ。

第12話

「明川の楊舜臣。精密機械か。」

と呟いていると御幸が

「コントロールに関して言えば夏樹の負けだな。」

「そうだな。俺にあそこまでのコントロールは無いな。でもだからと言って」

「ああ。負ける理由にはならない。」

そう言つて試合に臨んだ。

楊は初回

絶妙なコントロールを駆使してボール1個分の出し入れをしながらウチの打者からヒットを許さなかつた。

その上で主審のストライクゾーンを偽るなどといった頭の良いピッチングにやられたのだ。

対して俺も初回、ヒットを許さなかつた。

140台のストリートに変化球を使い打たせてとるピッチングを見せた。

その後も試合は膠着状態になりスタンドの観客達は明川の勝ちを期待する声が出て

き始めた。

「一也。この相手に向いているグラウンドの雰囲気をごつちに引き戻す。」

その一言で一也は理解したのか

「市大三高まで隠すんじゃないやなかったのか？」

と聞き返してくる。

「向こうの投手が粘りながら無失点でいる事で流れが相手に向いてきている。」

「了解。」

三人称

流れが明川に向き始めた次の回から吉川のピッチングが一変した。

150キロ。

それもアウトローの際どい所に

この1球を見た瞬間に明川ベンチとスタンドの明川サイドに回っていた者達が気付いてしまった。

あの右の関東ナンバーワン

吠えるキング

吉川夏樹

が遂に本気を出て来たことを。

この回の先頭打者をストレートだけで三振に抑えてこの大会初めての吉川の雄叫びを聞いた

「シャー……!!!」

この雄叫びを聞いた我々は気付いてしまった。

あの吉川夏樹が明川という学校を全力で抑えに来たことを

そしてその雄叫びを聞いた明川のエースの陽以外の心が折れそうになった事を。

吉川がストレートのみで三者連続三球三振に抑えた後に投げる陽は守備に着くメンバー達全員に声を掛けた。

すると明川のメンバーの心の亀裂が少し修復したようにも見えた。

陽がこの回も何とか無失点に抑えるも次の回は4番から

その事実は明川の陽に大きいのしかかった。

あの回からギアが上がった吉川のピッチングの前にバットをボールに当てることすら出来なくなった明川のメンバーの1人がベンチでこう言った

「勝てない」

と

その声はとても小さく・・・そして弱々しかった。

先頭打者の哲さんが初球を叩き、右中間へ強く低いあたりを見せた。

そしてそれに続く俺は陽の配球を読みアウトローに入ってくるカーブを振り込みながら振り切る。

打球は矢のように鋭いライナーで飛んでいく。

そしてセンターの電光掲示板に当たり試合の流れを確実に呼び込む一打のツーランホームランになった。

そして試合は最終的に7回コールドで俺たちの勝ちだ。

試合後、俺達は観客席で市大三高対薬師の試合を見ていた。

「一也。」

「どうした。」

「お前のリードであの4番にいた轟を何打席三振に抑えられる？」

「さあな。でも3打席は抑えさせてやるよ。」

とバスで話していると1年達が遅れてバスにやって来た。

そして3人の聞いた内容は

後、相手になるのは成宮鳴だけと言う話だ。

この屈辱は試合で返すしかないな。

と考えながら次の試合に備えるのだった。

そして薬師とのしあいとうじつ、オーダーをみると

1番サード轟雷市

ダルいな。

俺はそう思いながら試合に望むのだった。

「夏樹。このオーダーの意味・・・わかってるか。」

と一也が言ってきた。

「わかっている。こいつなら撃てると思って1番に入っている。」

と答えると一也も同じ答えのようで少し笑っていた。

初回の俺のマウンド。

俺は投手陣に一言言われてからマウンドに立った。

その言葉は

「轟雷市を、振じ伏せろ。」

と言うシンプルかつわかりやすいものだった。

それを聞いた俺のこの試合の第1球は

アウトローに

152キロのストレート